

「高田小学校の文化財探訪の取組」

1 学校名

南九州市立高田小学校

2 学年・人数

1～6年生（計62人）、※保護者・学校職員・地域の有志も参加

3 日時・場所

(1) 学習会等の日時・場所

- 平成28年7月19日（火） 高田三世代塾としての見学会
高田タービン
- 新聞記事作成：平成27年12月～平成28年1月 放課後・冬休み

(2) 発表の日時・場所

平成29年2月16日（木） 南日本新聞紙上で

4 伝承・活用に取り組んでいる史跡の名称・時代・特徴について

(1) 名称・時代

- 高田タービン（たかたタービン）：昭和初期

(2) 特徴

高田タービンは、南九州市高田の永里川中流にあり、正式には「穴川堰四号井堰ポンプ場」と言い、1935年に建設された。毎年6月から10月に動いて、水を集落の水田へ送り、鹿児島県の奨励米であるヒノヒカリの栽培に一役かっている。その仕組みは、川から水をポンプ場へ導水して水車を回転させ、水車につながった軸がベルトを動かしてポンプ軸を回転させると、揚水ポンプが起動して川の水を吸水管から揚水し、配水槽を経由して、各水田に配水させるというものである。電気や石油などを使わず、水の力だけでポンプを動かしている究極のエコエネルギー機関である。なお、国内で現存・稼働している例は他になく、「機械遺産」登録を申請中である。

5 保存会や地域との連携の具体

高田小学校区では、「高田三世代塾」という、児童・保護者・地域の高齢者の三者が、年10回ほど、第三日曜日に体験活動をするという取組をしている。「高田タービン」は「高田水ネット」が管理しており、農事法人「土里夢たかた」の協力を得て、「高田三世代塾」・学校が連携して2年に1回の見学会を行っている。今回は、南日本新聞社の依頼を受けて「わたしたちふるさと発見隊」のコーナーのために、4～6年生が記事を作成した。

6 活用の取組の工夫した点

発表のために、「水ネット」の方に詳しく説明してもらったり、建設した「西島製作所」に電話して調べたりした。また、新聞社のアドバイスも得ながら、分担して記事を書いたり図を描いたりして、読者が見やすく分かりやすいように工夫した。

7 取組の様子



「見学会での様子（室内の機械）」



「タービンの仕組みの説明」

8 参加児童・保護者・保存会・教職員等の感想・意見

【6年児童】

- ・ この新聞を作って、初めて知ることや驚くことがたくさんありました。例えば、80年間も現役で活躍していることに、とても驚きました。これは、昔の人々の苦勞のおかげだと思います。昔の人々が、干ばつの被害を受けても、あきらめず協力し合うという熱い思いがあったからこそ、こんな立派な揚水場ができたのです。また、電力を全く利用せず、川の水流を力に水車を回し、その力で揚水をしていることにも驚きました。「究極の省エネポンプ場」と呼ばれるわけです。この貴重なポンプ場のことを、もっとたくさんの人に知ってもらいたいです。そして、5年後いや10年後、もっと先まで現役で活躍してほしいです。

【教職員】

- ・ 児童が地域の歴史を知ることで、地域への愛着や関心がより高まったと思う。校区には、高田磨崖仏や飯倉神社など貴重な史跡があるので、これからも、見学の機会を増やし学習発表会等で地域の方々に発表していきたい。